



卓 話



「江戸の坂道に魅せられて」

坂と川の研究者

朝倉 毅彦氏

江戸＝東京には、本当に坂道が多い。そしてその坂道には、実に小まめに名前が付けられていて、その名前を見るとなかなか面白いが、よく目に付くのは、大名や旗本の屋敷があったためそれに因んで名づけられたもの、また神社や寺の傍らを通るので、その寺や神社の名に因んだもの等である。



勿論それだけではなく、坂の形状によるもの（九段坂、夫婦坂など）、坂からの眺望によるもの（富士見坂、潮見坂など）、伝説によるもの（綱坂、山吹坂など）等々多種多様であり、また由来の分からないものも少なくない。四谷近辺にも、紀伊国坂、高力坂、西念寺坂、女夫坂、津守坂、須賀坂、鉄砲坂など多くの坂道がある。

私が東京の坂道に興味を抱くようになったのには、あるきっかけがあった。

それは37～38年前のことになるが、勤務先の社内報に何か寄稿するよう請われて、勤務先の社屋の近くにある「津守坂」の由来を調べたのである。その「津守坂」というのは、かつてこの辺に松平撰津守という大名の屋敷があった為、撰津守の下の方を取って「津守坂」というのだという事や、社屋の敷地もその大名屋敷の一部に当たるのだという事も一応聞いていた。しかし、それ以上の事は知らなかった為、この際それを調べてみようと思いついたのだ。

一方、私はもともと歴史小説、時代小説等のいわゆる”歴史もの”が好きだったが、丁度30歳の時に読んだ子母沢寛の小説「勝海舟」が非常に面白く、同時に海舟の生き方に感銘を受け、また彼の生きた幕末・維新の歴史に深く興味を持つようになった。

以来幕末・維新の歴史に関する本をいろいろ読んだが、それらを読むうち、少年時代に大仏次郎の「鞍馬天狗」を愛読して勤皇党びいきだった私は倒幕派に転向してしまっ。そんな中で、私が最も同情したのが会津蕃

主、松平肥後守容保である。彼はその聡明で誠実な人柄を見込まれて、混乱の極にあった京都の治安回復の為に設けられた「京都守護職」という大役を押し付けられてしまう。時の帝、孝明天皇は容保の聡明で清純な人柄を深く愛し、また彼自身とその家臣達の精励格勤ぶりに絶大な信頼を寄せた。容保とその家臣達は、天皇の信頼に応えるべくまさに身命を賭して働いた。しかし、孝明帝の急死により活発化した倒幕派の策謀により、舞台は大きく回転し、忠臣の容保は逆賊、朝敵のレッテルを張られて京を追われる。結局、郷国会津に追い詰められて籠城抗戦の末、遂に降伏のやむなきに至った事はよく知られる通りであるが、彼と家臣達の無念さは実に察するに余りあるものがある。

話を津守坂に戻すと、調べた結果分かったのは、この撰津守は尾張徳川家の分家である美濃高須（現在の岐阜県海津市高須）3万石の城主の松平家ということだった。そして何と驚いた事に、松平容保は会津の松平家に男児がいなかった為に、この撰津守の家から養子に入った人物だった事が分かった。しかも、彼はこの四谷の屋敷で生まれたという。何も知らずに自分が毎日働いていた場所が、容保の生誕の地であったとは・・・。

それを知った時の私の驚きようは尋常なものではなかった。身体がぞくぞくするような気分襲われ、異様な状態に陥ってしまったのである。

それから私は江戸の坂道に深い関心を寄せるようになった。すると妙なもので、坂道に関心を持つようになってから、いろいろな所で江戸の坂道に出くわす。

例えば、杉浦明平の「小説・渡辺華山」や、華山の評伝などを読んで、江戸時代の著名な画家として、また蝨社の獄で処罰された人物として知っていた渡辺華山が、三宅坂と深い関係があった事を知ったし、慶安事件の丸橋忠弥の名に因む忠弥坂、振抽火事（明暦の大火）と本妙寺坂、新選組の近藤勇の剣術道場があった牛込柳町の焼き餅坂など、次々に私の興味を引く坂が現れて来て、とうとう”坂道本”を2冊も書く事になってしまったのである。

東京の坂道には、なぜか根強い人気があるが、種々出版されている”坂道本”等を見ても、坂道の楽しみ方は人それぞれに異なり、様々に楽しんでいるように見受けられる。私も元氣なうちは、江戸・東京の坂道を私なりに楽しんでいきたいと思っている。